

【鵜飼観覧船】

岐阜市の鵜飼観覧船造船所

長良川の鵜飼見物の観光客を運ぶ観覧船は、長良橋のすぐ東の南側の土手にある一つの造船所で作られている。この施設は、岐阜市が観覧船の建造と維持管理を引き継いだ1927年から営業している。この造船所の職人は伝統的な造船技術を使い続けているため、新たな観覧船の建造は、多くとも毎年2艘のみである。この造船所は一般にも公開されており、観光客が建造中の舟を見ることが出来る。造船所は年末年始を除き、平日の午前9時00分から午後3時00分まで開いている。

伝統的な建造方法

鵜匠が持つ技能と同じく、伝統的な木造船を作るための技術は、長良川沿いで生活する船大工により、何世紀にもわたって維持されてきた。観覧船にはいろいろなサイズのものがあり、舟のサイズに応じて15～50名の乗客を収容することができる。

舟は軽量で耐水性に優れた高野槇で建造される。職人が使う用材は、少なくとも4メートル×40センチの大きさが必要で、また、樹齢が少なくとも130年の木から採取しなければならない。この木は、岐阜県の東濃エリアから長野県の木曽地域にかけての森林に生えている。一本の木から、およそ10枚の板が作られる。

板は、およそ1年乾燥させることでやっと思えるようになる。乾燥させた後、板は舟釘と呼ばれる大きな鉄の釘で連結される。舟釘は観覧船の建造のために特別に手作業で作ったもので、いくつかのサイズがある。建造プロセスにおけるすべてのステップ（舟のそり加減を作ることからそれぞれの板を木の自然的特質に合わせて配置することまで）は、あらかじめ決められた設計に基づくものではなく、職人の直観と技能に基づいている。そのため、それぞれの船は、船舶メーカーの技巧が表れたユニークなものになっている。2010年、この造船に係る匠の技は、岐阜市重要無形民俗文化財に指定された。